文学の研究〔V〕

—文学と自然・外国(英米)文学と日本文学における自然観(1)—

栃原知雄

I

この誌上で四回にわたって，文学と言語を中心に文学論を書き続けてきたが，今回は文学と環境の問題を考察する。私達は私達を含む世界の中で生活をしてきたのであり，又生活をしているのであるから，そういう世界に密接な関係があるのは当然であって，この世界を環境という言葉で呼ぶならば，先づ第一に「自然」が考えられる。広く環境というならば，自然ばかりでなく「社会」もその中に含まれるのであるけれども，今回は先づ自然をとりあげて，外国（英米）文学及び日本文学における自然の取り扱いについて，又自然観について考察する。

Walter Savage Landor (1775—1864)[1] 作 'Finis"「述懐」という短詩に自然への深い親愛が述べられている。

I stove with none, for none was worth my strife.
Nature I loved and, next to Nature, Art:
I warm'd both hands before the fire of life;
It sinks, and I am ready to depart.

（争はざりき，争ふも益なき世や愛でしは「自然」，次にまた「芸術」をも，雙手命の火にかざし温めしかど，火ぞ沈む，噫，何時とてもかしまだたむ。—蒲原有明訳—

およそ文学の内容，或は文学の研究対象を大きく別けるならば，一つは人間或は人事であり，一つは自然であり，今一つは超自然或は超人間といえるであろうが，人間の注意と興味は，なんとしても人間にそそがれる。近代になるにつれてこの事は益益強くなるようである。 Alexander Pope (1688—1744)[2] は「人間の然るべき研究対象は人間である」（"The proper study of mankind is man"）と "An Essay on Man" の中に書いているのは周知のことであるが，そして私達が文学の研究において人間の問題に興味を深くもつのであるが，自然も亦文学において重要な役割を演じていることに注目すべきであろう。

さて，この論文における「自然」の取り扱い方，論述の方法と計画について筆者が考慮することは，できる限り単純な公式論や類型論とならぬよう注意したいことである。それを警戒することからはじめねばならないと思うのである。よく東西文学における自然観の比較などという題目で簡単に公式的に類型的に割り切ってしまった論述に出合うことがあるが，勿論東西の自然観の相違点はあるだろうが，それを簡単に処理してしまってはこまるのである。従って，この論述では，外国（英米）文学と日本文学における自然観の相違点や相似点を考慮に入れて各作家，詩人の自然観の相違点や特徴をなるべく具体的に平易に解明して文学における自然の取り扱い方或は自然〔美〕観或は自然感情を述べてみる積りである。しかし，今日まで自然感情の綜合的見地に立つ類型論の方法で，秀れた研究のあることを忘れてはならないので，その例をあげれば大西克禮著〔(1)「自然感情の類型〕[3] (2)「萬葉集の自然感情」〕[4] である。又，自然の愛の発達と東西の文学にあらわれた自然の相違をまとまりよく論述したものに土居光知氏の論文（「自然の愛の発達」—「文学序説」）[5] のあることは文学の読者の知るところであろう。これらの論文が発表された頃，当時若い筆者が数数の教を受けたことは当然であって，今日，文学と自然に関してものを考えたり，或は

講義をしたりする場合にいつも脳裡に浮ぶのはこれらの論文と更にも一つは厨川白村の（「東西の自然詩観」—厨川白村全集）論文である。筆者が，文学における自然の問題に意識的に関心を持ちはじめたのはこれらの論文を読んだ若い頃であった。何か文学研究における郷愁のようなものを感じる。元来，日本人は自然感情に関しては，独自の方向に，高度の発達をとげ，自然に関する直観の鋭敏繊細な点において，その情感の内面的な点において，又その表現の幽微精妙な点において，世界の他のいかなる民族にもおとらないということができるであろうし，更に一般に芸術精神や美的意識を広く考えて，日本民族が，他の場合に類をみない多くの特徴をもっているということができると思う。従って，この論文で先づ日本文学における自然観の変遷を歴史的に概観するとこから始め，自然感情或は自然美体験の点において，日本人独自な本質及び発展の仕方を考察するところからはじめてみよう。しかし，その独自な性格や，特殊の発達に対する真の把握と理解は日本人の場合だけに視野を限定していては，広い文学における自然観を見落すことになり，独自性も特殊性も，他の文学における自然観と比較検討することによって初めて円満に認識されることは勿論のことだから，次の段階として外国文学（英米文学）における自然の取り扱い方，或は自然（美）観について考察を行ない，各作家詩人について論述を進めて行く順序を取ることにしたいと思っている。

Ⅱ

私達日本人は幸なことに「山紫水明」と言われる国に生きてきた。（尤も，最近ではこの自然の清純が色色の事状のもとに汚染されようとしている）。日本は，山の姿，川の流れ，四季折折の花にめぐまれた美しい清らかな国であったと言われてきた。自然は時に生活の破壊者であった場合もあって，洪水，津浪，地震，暴風，噴火など自然が暴威を示した場合もあったけれども，自然は私達の祖先に慰安と詩心を与えてきたのであって，自然は人間の慈母であった。日本の古代人の自然観，即ち，古代人が自己の周囲の自然をどう意識したかは神話（自然神話）をひもとかねばならないので，勿論，「古事記」や「日本書紀」が大きな手がかりとなるだろう。そしてその自然意識は，この国土が海も川も山も野もすべて，神神のうみ給うたものであり，国土を単なる土塊とは考えず，山川草木をも単なる命なき存在とは考えず，これらの自然物に神神の働きを認めたのであった。これは古代ギリシヤにも相似の考えがあって古代ギリシヤの詩人の言葉に「すべてのものは神神に満されている」というのがある。自然と人間との根源が一つであるという意識があった。自然と人間が神のうちに融合されているという観念からで，自然と人間との未分離の状態ともいい得るであろう。自然が人間同様に言語を語るので，「日本書紀」にも「草木ことごとくものいふ」という意識があった。自然のうちに神の働きを観，自然のうちに人間的な行為が認められた。言わば，神と自然と人間の未分離の意識ともいうべきものであろう。自然も人間も神の世界に包摂されていたから，自然の事象を客観化して捕えることができなかったのであろう。従って，概観的に言って未だこの段階では純然たる叙景詩は生れてこなかった。自然美は，それだから，叙景詩でなくむしろ抒情詩と結合することになるのである。人間感情を表現する場合，自然と関係させ，自然の情景と結びつけることになる。「……泣かじとは汝はいふとも山處（ヤマト）の　一本薄　頂傾（ウナカ）し汝が泣かさまく　朝雨の　狭霧にたたむぞ……」大国主命が倭国に立つ時，命の出立を見送った須勢理比売に与えたこのような詩歌となるのである。山のふもとにある一本の薄が，失意の女性のうなじをたれて泣く様子と，朝雨に野面を覆う狭霧が，女性の涙にくれて視界がおぼろにかすむ様子を表現したもので，人間感情を自然の情景と結びつけた一例である。

次に，この簡単な自然の情景を人間感情の表現に当てた段階から，生活環境と生活意識が変り，自然に対する観察も異なってきて，自然の描写も複雑となる。自然描写が複雑になると自然描写が抒情歌のうちから独立して，自然描写をその生命とする状態になる。こうして「萬葉集」による「自然観照」の歌の出現となるわけである。尤も，注意を要することだが，萬葉集の歌の中にも古代の自然観，即ち，自然のうちに神の力が宿り草木に

も神霊があって，ものをいうと考えた自然観の歌が残存していたことを忘れてはならない。萬葉集には先づ，自然の情景に接して心の底に秘められた愛情が触発される種類の歌は数多くある。「わぎもこに　恋いつゝをれば　春さめの　そも知るごとく　止まずふりつゝ」はその一例に過ぎない。萬葉集歌における自然は，こうして人間と同情し合う存在でありながら，人間と自然との区別がされたり，対比されたりすることになる。こうして，人間と自然との分離意識が生れることになり，自然そのものの美を探究する歌が生れてくる。即ち自然の清澄美を扱う歌が出現する。「大海に　島もあらなくに　海原の　たゆたふ浪に　立てる白雲」はその一例である。萬葉集の清澄美を扱う歌には「清し」とか「やさけし」とかいう語に読者は出会う。更に聴覚による自然の静寂美を歌うものにも出会う。「わが宿の　いささ群竹　吹く風の　音のかそけき　この夕かも」或は「淡海の海　夕浪千鳥　汝が鳴けば　心もしぬに　古おもほゆ」更に，優雅繊細の美を捕えた歌もある。「吾が背子が　挿頭（カザシ）の萩に　おく露を　さやかにみよと　月は照るらし」。自然の客観性が意識されはじめて，叙景の歌が，清澄美静寂美，繊細美をもつ。そして最後の繊細美は平安時代の自然観照の出現する源流となるわけである。こうして萬葉集歌の自然の取り扱い方を考察してきたが，その扱い方の態度には地上の人間に親密な面が多い。地上を離れた天界や空界における自然の広漠壮大さについてはほとんど歌われない。従って，この点に関し，欧米の作品と比較すると，月を除く太陽や星，雷鳴，疾風，暴風雨などの強烈なものを歌うことはいたって少い。狭い範囲の自然の風情を題材に選ぶようである。勿論，これは日本古代の生活状態とも，亦日本の風土気候の状況とも大きく関連することではある。文学と風土の問題である。日本人は自然を愛する民族であるだけに，日本文学の研究を行う場合には風土と文学の関連やその変遷について考察する必要があるのである。

III

こうして，自然文学を中心に日本の歴史を概観的に考察してくると，中国（支那）思想の影響ということを省略するわけにはゆかない。しかも，この問題は比較文学の課題として重要なことで，専門家にゆずらねばならないが，ここでは「懐風藻」に現われた日本人の漢詩にみる自然観を簡単に考察する。取り扱っている詩材で目立つのは「宴に侍す」の詩であり，次に目立つのは，自然詩（叙景詩）であろう。自然の風景を叙した詩は難解な文字で描写しているが，展開する風光を直写するというよりも，支那風土について最も適切であると考えられるような表現をとっていることである。作者の眼底に用意されている支那風な精神が基になっている表現といってもよい。そしてこの支那風な自然景観には自然の美と人生の繁雑とが対蹠的に考えられる。自然と人間とが一応対立の関係に立つ自然観ともいえる。

更に，他の一つの影響は「仏教」であろう。平安朝時代の初期における「真言」の教によって，自然の物象に仏の教の意味が担わされるようになる。自然の物象，或は牛馬鳥獣をも仏相においてみようとする態度があった。ただ，しかし，自然のうちに自然を超越するという思想に関しては，古代日本人の抱いていた汎神論的な自然観と相通ずるところはある。けれども，「懐風藻」における自然は人生と対立する意味をもつ特徴があるのに対して，「記紀」歌謡における自然観には，神と人間と自然の区別が充分な姿で意識されていなかった事に注意を払うべきだろう。古代的な自然観の残存を内面にもちながら，類似面をもつ支那の自然観が取り入れられたと考えてもよいことになろう。こうして平安時代には自然美を尊重して，その自然美につつまれた浄土の壮厳さを加味する作品の出現をみる。仏教思想からきた自然観が日本古来の自然観に融合して特殊な表現をもつ作品の出現となる。この時代の公卿の間にみる自然観照は当時の文学作品からくみとれるので，「「枕草子」を筆頭とする諸作品から「もののあわれ」という美的範疇にみる。又「古今和歌集」にもみる。自然の一部についての或は特定の風景について微細な様相を，優雅繊細な感覚をもって描写する。それには夏と冬の歌が少く，春と秋の歌が多い。英米文学には夏と冬の詩は比較的多い。更に「源氏物語」がある。尤も「枕草子」には冬の景色の描写があり，「源氏物語」には夏の景色の

描写はある。この細心精緻な観察は「懐風藻」の漢詩にあるあるものとはちがって，真に日本の風景に則した観察が行われたということができる。ただこれらの自然観察は田舎や山地の自然を対象としないで都内の自然風景を対象とするものが多いのは読者の知るところである。従って，自然に対する美意識はこのような意味あいからいえば封鎖性があったとさえ言える。言わば，自然のままの自然ではなくて，人工化された自然が対象となっていた。この人為的というか，或は人工的というか，自然を人間世界にひきよせて観察することは平安時代の自然観の特徴といえるであろう。自然が人生の背景となって，自然が人事に調和しなければならなかった。自然は見る人の気分や心境の反映であった。尤も，都における貴族の生活形式が発展してくると，その反対に貴族の庭園などに自然の風尚をあらわそうとする現象もあらわれていた。

日本人の自然意識は中世（鎌倉時代）に至って更に発展をとげる。武家政治下における現実経験のめぐるましい変転と，仏教想思の影響とで，人生無常という考えが人人の脳裡に浸透し，自然観にも影響し，自然も亦「はかないもの」の象徴であるという意識が濃厚になった。それは，例えば読者のよく知るように，「平家物語」からも「方丈記」からも読みとることができる。「ゆく川の流れはたえずして而ももとの水に非ず。淀みにうかぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまることなし。世の中にある人と住家とまたかくの如し。」「その主人と住家と，無常を争ひ去るさま，いはば朝顔の露に異ならず。或は露おちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほ消えず，消えずといへどもゆふべを待つことなし」こうして自然は世の無常を象徴する。戦乱のための破壊や，自然の暴威（大地震など）を読者は読み取る。自然を無常とする意識は「徒然草」にもあらわれる。その他紀行文にも世の無常という考えは人間世界においては時と処とをとわずあらわれる一般理念であろうが，自然の形象がこの理法を表現すると考えたのは中世の自然考察の一つのきわだった特徴といえるであろうと思う。鎌倉時代の人人は精神生活の純潔を保持しようとして厳粛，清浄な自然を好んだ訳だが，素朴純真な心で客観界に対して，あるがままの自然を素直に見ようとする態度でなく，自然のうちの厳粛と純潔を抽象しようとする態度であったといえるだろう。

下って，室町時代には再び平安貴族的趣味の復興があったといえるが，鎌倉時代を通り過ぎたために鎌倉武士的な趣味も受け継ぎながら平安貴族的なものを調和しようとしたかにみえる。この態度は「わび」と名づけられるものであろう。枯れた心というものは禅竹の「物みな枯れつきて，かそかに幼く」という言のように「初心にかえる」意があるだろうし，読者は，謡曲における自然意識を想起するであろう。室町時代はこうして近世の時代をむかえる準備をしていたともいえる。中世から近世にかけての武士社会が道徳主義的自然観を強くしたのに対し，宗教的，道徳的規範を脱した見地から自然をみようとする一つの特徴が近世に発展した。自然を神の顕示と考え，又無常の象徴とみなすのでなく，自然を自然そのものとして観察しようとする傾向がみられる。自然自体として観察しようとする傾向である。享保年間以後，西洋の自然科学の影響が顕著となってからはますますこの傾向は強くなる。江戸時代に入ると主観的な自然観から客観的な自然観へと移行する。そして自然を自然自体としてみようとする態度は江戸時代の所謂町人芸術のうちにもあらわれてくる。そして明治時代をむかえることになる。

Ⅳ

明治時代をむかえ，欧米文化の接触を機として日本人の自然考察も新しくなり，自然環境論の発展をみることになる。人間の歴史や文化の発展はその地盤である自然環境を無視することができないという考え方が生れる。所謂「地によりて気をうつす」という考え方である。勿論，自然の環境が人間生活に対して規定性をもつという萌芽的な考え方は日本においても早くから認められただろうが，この思想が実際に発展するのは，明治維新以後，明治時代をむかえてからである。明治時代にみられる新しい自然観は，この自然環境論においてみられるのみでなく，所謂自然主義文学における自然の見方にもあらわれる。更に英米，殊に英国ロマン派の自然観の影響にも関連がある。明

治初年の自然環境論で，考察方法の媒介となったものの一つに，Herry Thomas Buckle (1821—61)の主著 "History of Civilization in England"（「英国文明史」）6）があった。日本でもその当時二種類の飜訳書が出た位である。人間の厳しく烈しく感触引誘を受ける身外事物は四種類あるというのである。それは気候，食物，地貨，天造の光景であって，身外万種の現象はこの四種の一つに管属するというのである。更にもう一つ飜訳書で注目すべきは Charles de Secondat baron de Montesquieu (1689—1755)の "L'Esprit des lois"（「萬法の精神」）8）であろう。これらの影響の下に書かれた日本人の自然環境論は数種あった。自然環境の規定性から人間歴史を理解しようとする歴史叙途もあわられた。例えば明治27年に出た内村鑑三の「地人論」は明治時代における人文地理学概説書の嚆矢といい得るものであろう。自然環境論における自然は常に人間生活に深い関係と影響をもつものであった。前提として自然が人間と区別されている考え方であるが，何ら関係のないようにみえる人間と自然のうちに，両者が相関しているという考えをもつもので，漠然と自然を眺め，自然を単に詠歎するような態度をとる。従って，人生と切り放たれて考えられた客観世界としての自然が，再び人生に関係づけられているというべきであろう。人間観も明治の初期には士農工商の厳格な身分区別の関連で人を考えるのでなく，人は皆同じように天の造った同等の人という考えが生れてくるのである。人は貴賤上下貧富の別なく同一の人間であると考える。そして明治初期における自然環境論の発展も，このような人間観に裏づけされているといえるだろうし，人間観の成立があってはじめて自然環境論の発達もあり得たと考えられるのである。更に，明治時代にみられる自然観はこの自然環境論においてばかりでなく，所謂文学における自然主義における自然の見方にもこうした新しい思考が含まれていたといえるのではないだろうか。明治時代において自然主義発生以前にも自然の細微な描写がなかったわけでは勿論ないが，（例えば，明治20年代の硯友社を中心とする小説），小説における自然は，単に人事現象の背景としてとりあげられる傾向が強かったのであり，自然描写が平面的で固定化していたともいえる。この装飾的な傾向を小説から解放しようとしたのは自然主義文学であったといえるだろう。この自然主義の文学理論が発達して，文学を道徳や宗教から独立させようとし，甚だ写実的な小説が出現することになる。あるがままの世態の真相をそのまま表現しようとする写実小説が生れることになる。自然を一切の繋縛から解放して自然自体としてその真実をとらえようとする傾向は，例えば，小杉天外にみることができる。即ち「自然は自然である。善でも悪でもない美でもない。醜でもない」という見方である。このような自然観や小説観には，Emile Zola (1840—1902) の影響が大きい。「芸術と道徳と関係がないのは天文学や発生学が道徳と関係がないのと同じだ」という見解である。この自然主義的態度に対した，理想主義的な態度が生れることになる。その例に森鷗外，後藤宙外，夏目漱石をあげることができるであろう。「観察と試験とにて求むべき自然は事実なり。事実を得て足れりとするは科学にして美術にあらず」というのが鷗外の見解であって，美とは自然の精神であり，自然の相であり，美が精神中に渙発するのが空想であってそこから新しいものが生れるというのである。後藤宙外は，（明治40年と41年に発表した評論集「非自然主義」において反自然主義の立場を取った。只単に客観的態度でありのままの自然が描かれたとしても，究極において芸術的な価値はもち得ないという見解であった。又，自然主義に対して反対的態度を表明した漱石は，論理的な「文学論」において又多くの創作の中でその見解を示したのであった。

日本人の自然観を主に文学作品を中心にしてみてきたが，時代の進展に応じて変化発展の過程を辿っている。自然の中に神の働きをみ，又，自然を人間の友とし，時々支那大陸における自然描写を，日本の自然の景観にみようとしたことがあった。大きく別ければ自然のうちに深渕な精神を感得しようとする態度と詳細な観察によって真実の自然の姿に迫ろうとする態度をとった。現代では自然科学の顕著な発展の為に，自然に対す観察は極度に客観的になってきた。けれども猶文学においては自然に対する神秘的な見方が豊かに残存しているのである。自然を伴侶とし自然に人生の慰

安を求める心は，依然として現代の日本人のなかにある。自然を愛し，自然のうちに一切の生活をまた死をも自然に融化しようとする精神は現在の日本人の間にも保たれていると考えられるであろう。

V

次に，西欧の自然観を概観しよう。遠く古代に溯るとエジプト人の自然観を取り上げることになろうが，先づ草花への愛着がその特徴として思いあたる。古代エジプト人が，集会や宴会に，野に吹く花を集めて，食卓や床を飾り花を愛したり，女王の葬儀には広くあらゆる国内の花を集めて儀装を飾ったり棺を包んだ事は史実の教えるところである。自然物を宗教的崇拝の偶像とした。エジプト人の作った偶像は大方動物と人間の混合した不思議な像が多い。自然物の中で，特に自由な跳梁跋扈している動物を選び，それと人間とが合体したものが最も力強いものと考えた為であろう。アツシリヤ人の場合は，その神像が示すように，人面人体でそれは鳥の尾と翼とをつけている。空中を飛翔する鳥は，或る意味で人力以上であり，地上では人間が最も勢力があるものでその合体は最大に強力なものだという考え方からであったろう。こうしてエジプトとアツシリヤ人はものの利用或は実用の方面を重くみて，手近かな自然について考えたと思われる。自然を功利的な方面から離れて，人間と自然の関係を考えるまでに到っていなかった。自然美を小さなものに切り刻んで愛したことになる。自然の壮美を味う心理的段階に達していなかったといえる。エジプト，アツシリアからヒブリューの文明に移ると，自然の文芸をみることができる。而もその芸術は旧いから私達と縁遠いとは考えられない種類のものである。その最たるものは周知のように，「旧約聖書」である。ヒブリュー人は自然に対して恐怖心を抱くばかりでなく，悦びと憧れの情を自然につなぎ，愛好心と渇仰の情とを自然にそそいだ。これは宗教的情緒の発現であって，自然の全体を大観して，それを一つの大きな霊的存在の発現の姿とみたのであった。自然は人間より偉大なものの現れとみるが，恐怖心からばかりでなく嘆美し称賛する。自然に対し帰順し，信頼し，渇仰する心はヒブリュー人は持っていたとみることができる。「旧約聖書」自然文芸発達の歴史からみても，人類が第一に自然に最も多く接近した尊い文字であろう。人類が自然と呼吸を併せた抒情詩を発見することができる。「神，天地を創りたまえり」という句ほど，短かくて，しかも無限の崇厳美を表わす語はないといったのは周知のようにヘーゲルである。次に古代ギリシヤ人であるが，ギリシヤ人はヒブリュー人とは異った意味で自然を愛した。ギリシヤ人は多くの神話が山や川や海や森や地上の一切の物に籠っていると考え，又天上には天上で地上の神とは異った神神がおり，地の底にも下界の神神がいると考えた。ギリシヤ神話には神神と人間の交渉が談られたり，神神同士の交渉が談られたりする。ギリシヤ人の神神に対する態度はヒブリュー人とは異って，神即ち自然の現象を時に恐れはするが，大抵の場合，神神と人間は入り交って戯れたり，遊んだり悪ふざけしたりして自然と人間とが混交している。次にローマ人の自然観はどうであろう。ローマ人の自然のみ方は広大なものを目標としたといえる。広大な野原の景色とか大森林の光景とか，果しない大海原の眺望とかを好んだ。夜の天とか，日や月や星などを愛し，自然現象をながめてその広大さと美麗さに打たれた。ローマ人にも神話はあるけれども，ギリシヤから転化したものであり，やはりローマ人は自然を自然として眺めて楽しむという態度であったろう。ローマ時代の後半から，キリスト教の影響の下に，変化が生れてくる。キリスト教は人間関係を重視するから，人間を取り巻く周囲の自然に関心をもつ余裕が少なくなった。キリスト教はヒブリュー以来自然の宗教でもあったが，中世紀では自然の黙示という事は閑却されるようになって自然は神の玉座であるという考えが薄らぎ，時に自然は悪魔の住家のようにも思われた。神が自然の中にその姿を現わすとは考えないで，神は天地及び人間を創造して置いて，遠い天上へ去って，天上から人間界をつかさどっているという風な考えをもつようになった。従って，人間は自然と共に同化し，同感し，共に楽しむという風な考えはなくなった。中世紀はそれに封建時代の特徴として各都市の城壁が外囲の自然と人間を遮断した。自然の大景に長く止っていることができなかった。

どのように自然と隔離されても，自然に近づき自然を愛するというのが人間本来の要求であろうから，ルネッサンス期には文芸復興と共にギリシヤ，ローマの文明の要素が加えられようとする現象をみることができる。更に，自然と接触する機会があたえられ，ギリシヤ人のように自然と同化する心を喚起し，ヒブリュー人のように宗教的な情熱をも加味するようになった。文芸復興が起った中で，特に自然と人間との関係を力説したのはイタリアの哲学者であり詩人である Giordano Bruno (1548—1600)[8] であった。Bruno は[8]近代自然文芸を呼び起す先駆者の代表であった。この学芸復興の勢がヨーロッパ諸国に拡がったけれども，十八世紀には煩錯な知的な文芸が，その間に介在したから，自然を味うにも自由な空気の中で精神も肉体も開放して自然と交わる事ができなかった。ようやく19世紀初頭をむかえて英，米，仏，独その他の諸国に自由な自然文芸が勃興するようになったのである。

Ⅵ

18世紀末，人間生活を本然自然の姿に立ち帰らせ，人間の純な生命を発展させようとした先駆者は「近代自然文学の父」と呼ばれた Jean-Jacques Rousseau(1712—78)[9] であった。Rousseau は山高く水清いスウイスのジェネバ湖畔生れ，幾多の苦しい経験を経て放浪の旅に出るのであるが，それは自然が誘う力強い誘引からであったろう。そして，人間は自然に接触することによって，生命力の自覚を得るのだという信念をもつに到ったのである。"Confession"（「告白録」）の第6巻には次のように書かれているところがある。「初春の若芽を眺めた時のよろこびは口では言いきれない。再び春に出合った私は天国によみがった者のようであった。地上の雪のまだ解けぬうちに，牢獄のような住家を抜け出して，鶯の初音を聴きに急ぎシャルメットにとんで来た。もう私は死ぬことなど考えていない。……若し私が今にも死にそうになったら，どうか櫸の木の蔭へ運び出してほしい。そうすればきっと快くなるにちがいない」こうして自然力を自分の体軀にまで感じ取っていたのである。筆者はフランスの文学の自然文学に足をとどめている余裕はここではない。急ぎ，英国近代の自然文学に進まねばならない。この Rousseau の "Return to Nature"（「自然に帰れ」）という思想が先駆となって，18世紀末から19世紀初頭にはじまって，英国で自然主義（"Naturalism"）の文学が生れる。これに関する研究は今日迄日本でも随分行われて来た事は読者の知るところであるが，日本でも明治26年頃既に若い漱石が見事な論文をまとめている。1月文学談話会の席上で講述し後「哲学雑誌」に掲載された「英国詩人の天地山川に対する観念」である。若き漱石の才能を示すものである。筆者は英国ロマンティシズムをここで詳細に論ずる余白をもたない。これは他日の機会にゆずることにするが，ここで，明かな心眼を開いて自然を見た，又，英国ロマン派の詩人の中で，自然愛に対して最も強く真実を示した William Wordsworth (1770—1850)[10] に触れなければならない。Wordsworth に従えば，人間のこの世に生れるのは，むしろ，醒むるより眠ることであって，幼少の時期には前世の途から遠ざかっていないから，前世の影を深くとどめているが，次第に成長するにつれて遠ざかる。即ち，人間が生れた自然の懐から成長するにつれて遠ざかるというのである。けれども，人間は時あって，自然の懐をなつかしく思いかえすもので，どのような喧騒の中にいようとも，時として蘇更って来る瞬間がある。人間の中にしのび入った自然の姿がある。自然の慈母は常に人間の背後にあって人間を守っている。自然に遠ざかるに従って，一層苦しい思いをすることになるが，その苦しみの中から自然の慈母を求めてやまない。"sad, still music of humanity"（「悲しく静かなる人類の楽の音」）という句で表わした思想である。人間の苦しい経験や悲しい経験と，これを慰めてくれる自然の力との錯綜したのが，人生のこの幽韻悲調である。自然と人間との関係は情緒的であるばかりでなく，実際の行為，日常の生活上の問題とされる。倫理的な考え方となる。詩人の眼からみれば人間は平等なものであり，更に，人間同士ばかりでなく禽獣も草木も人間と同様，同じ呼吸をしているものとみたのである。草木の凋落にも，鹿の子の死にも，人生の姿と人生の悲痛を味った。Wordsworth の自然観は，自然を生きている霊あるものとみて，その霊と人間の精神

の間には，完全な愛の交流，即ち絶対な融合があると考えた。それは文芸復興期の新プラトン派の自然観を一層徹底させたものである。自然の感情や生命の動きを観察し共感することができる。Wordsworth の詩は読者の知るところと思うが，このような生命の交流を情熱をもって記したものである。中でも，1805年の "The Prelude"（「序詩」）は，Wordsworth の天才の最高潮を示すもので，この中で幼少時代から大学時代，ヨーロッパ旅行からフランス革命中の体験や印象を追想しつつ，Wordsworth の自然観や人間観の発展の経路を物語っていて，幼児のもつ "natural piety"（「生れながらの敬虔」）がいかに成人の不滅の信念にまで成長するかを歌っている。

Wordsworth の自然観は古代ギリシャ人の様に自然物の中に霊的実在を認め，それが人間の精神に神秘的な交流をすると解されるが，ギリシャ人のように自然物の各各に霊的実在を認めるというのでなく，つまり汎神的ではなく，自然の中に唯一の隠れた神秘力を認めたのである。万有共通の神秘力を認めた。そういう意味では一元論者ということができる。蒼空の星辰の中にも，変り易い雲の中にも，花や樹木の中にも，小石の中にも固定せる岩の中にも流れる水の中にも，目に見えない空気の中にも，即ち総べての実在に「能動的な力」（"An active principle"）が存在していると解した。この不思議な力は Wordsworth には哲学上の真理と映じたのである。そしてこの力を倫理上の一大教義とさえ考えた。

"One impulse from a vernal wood
May teach you more of man,
Of moral evil and good,
Than all the sage can——"

（春の森から得た感化はあらゆる聖者の教えよりも人間に関して人に教える事が多い）

自然を愛するものは，人間を愛するに至るのである。「人間の性質」（"human nature"）ということは人間の心という意味であって，自然（"nature"）ということは人間の心以外にある外界の世界をも意味する。しかも，外界の世界を構成する物体はそれ自信生きていないが，その中に一つの共通の霊（"Soul"）が循環している。それは一つの人格をもっている。この人格的なものを自然（"Nature"）といっているのである。そうして人間の霊が自然の霊と相触れることが出来るのである。

Ⅶ

次に George Gordon Byron（1788—1824）[11] であるが，Byron の詩のなかには，山岳と大海の描写が多く，しかも描写は絵画的である。Byron も亦，古代ギリシヤ人のように，生活上に利益があるものを愛するという一種の功利的精神からではなく，利益を超越した審美的精神から，山や山岳を愛した。"Manfred : a Dramatic Poem"（1816）の中の山岳の景観は凄惨なものである。又怒濤逆巻く大海の景色も特徴のあるもので，"Don Juan"（1819）の第2篇中の難破船の光景も亦凄愴なものである。"Child Harold's Pilgrimage : a Romaunt."（1812. Cantos Ⅰ—Ⅱ）（1816. Ⅲ）（1818. Ⅳ）や "The Corsair : a Tale（1814）の中には大海の壮大な景色を歌っている。Byron は又，静寂な或は寂寞な自然をも愛した。けれども平和と静寂美を好んだ Wor-dsworth と異って，Byron は怒り狂っていて，しかもその奥底にひそめる寂しさのある景色も愛した。Byron は静寂な自然も，亦怒り狂う景観も等しく愛し，そしてそれらを美化する力量に富んでいた。Byron は，けれども，Wordsworth の批評に従えば感性が足りなくて，詩のつくり方も巧みでなかった。Byron の山水の美は英国のものばかりでなくヨーロッパ大陸や東洋のものにも亘っている。Byron も自然美を憧憬した詩人ということができるのであろう。

Percy Bysshe Shelley（1792—1822）[12] の詩は理想の結晶したものである。足は地上にあっても頭は天空を駈けた詩人であった。Shelley も亦自然界に慰藉を求めていたので，自然界の万有は唯一の知己であり，又無限の意味を寓していた。現世において煩悶と苦痛に満ちていたけれども Byron のように現世を罵倒しなかった。脱俗的理想の国を夢想した。けれども Wordsworth のように田園に退隠して自然を友とするというのでもなかった。Shelley の詩には Wordsworth にみる哲学思想もあり，Byron のような圧世的革命思想も含まれている。自然を生命あるものとし，各各異

った自然美の奥底に生命を宿していて，互に接触し異体同性のものだという見解をもっていた。この点は Wordsworth の自然観と同一であるといえるだろう。Wordsworth との相違は，Wordsworth が万有の真底に横わるものを思想と呼んでいたのに反して，Shelley はそれを愛と呼んでいた事である。Shelley は愛をもってすべてを説こうとした。"The love whose smile kindle the universe"（「宇宙を燃やすものは愛の微笑である」）というのである。恋愛と美とは万有の生れ活動する源流であると考える。Shelley は，だから，徹底徹尾，哲学者の態度でなく，詩人の態度で自然に接したといえる。自然の中に伏在している一切の秘密を美的精神と愛の本質とをもって解明しようとした。自然に接して，物の形体を忘却して，精神の中に自己のすべてを没却した。花を見ても鳥をみても，Shelley には幻のような霊が心眼に反射したのであろう。草木の霊と人間の霊との間に幽遠な哲理が横っていると信じていた。自然物の形体そのものは重大でなく，自然物の内に潜める霊的実在が重要であったのである。Shelley は美そのものの為に美を愛し，美そのものを歌った。Byron と異って俗気がなく，純然たる芸術家の態度をもっていた。

John Keats (1795—1821)[13] は，ロマン派の他のどの詩人にも劣らぬ芸術家（"artist"）であった。革命家として Byron にゆずり，思想家としては Wordsworth, Shelley に及ばなかったとしても，言葉を創り，言葉の芸術を残した点で他のいかなる詩人よりも秀れていた。この意味において Keats 程純粋な詩人はなく，Keats 程の天才は Shakespeare を除いて他に発見することはできないであろう。「うるわしきものはとこしえのよろこびである」("A thing of beauty is a joy for ever.")自然界の妙音をききわける事，音楽家が楽器の音を識別するように敏感であり，自然界の色と形をみる事，敏感な画家のようであった。それに，自然物の香をかぐ鑑識は常人以上のものであった。この意味では感覚の詩人でもあった。"Ode to a Nightingale", "Lamia", "Isabella", "Ode on a Grecian Urn", "The Eve of St. Agnes", "Hyperion" その他の詩が証明する。「美は真であり，真は美である。これは地上にて知るすべてであり，しかも，知らなければならない一切である」("Beauty is trnth, truth beauty——that is all Ye know on earth, and all ye need to know.") Keats は一切の自然に対して美と真と喜びを見出した。天地間の万有はことごとく美の権化であって，同時に詩の権化であった。この点では，古代ギリシヤの自然観に通じるところがある。自然界の万有には，何れも霊的実在が宿っていて，人間と種種の面で関係していると信んじたのであり，この点ギリシヤ思想を復興させた詩人ともいえる。この霊的実在を理性からでなく，Keats の場合は，ギリシヤの自然神話からその思想が流れて来ているといえるだろう。

VIII

最後に，アメリカ文学における自然観を考察しなければならない段階がきた。それは広汎な問題であるので，この論文ではアメリカにおける自然文学の代表者とも考えられている Henry David Thorean (1817—62) を中心に考察する。アメリカ文学は17世紀に始まる。植民地時代以来，アメリカの思想のうちで，その人間観の特色は，人間の霊に関する問題が主であった。この霊の問題は諸方面に広がり，霊と神と自然と人間との関係を明かにすることからはじまった。自然を愛する文学は一般にロマン主義文学の特色であるが，18世紀の終りに Hector St John de Crèvcoeur (1735—1813) というフランス人の書いた「アメリカ農夫の手紙」(1782) は Rousseau のように田園の生活を感情的に賛美したものがあった事を David Herbert Lawrence (1885—1930)[14] は "Studies in Classic American Liteatare" (1924) の中に触れているが，このようなセンチメンタルな自然観を通り過ぎれば，アメリカでは19世紀の詩人はことごとくといってよい程自然を歌っている。William Cullen Bryant (1794—1878)[15] も，John Greenleaf Whittier (1807—92)[16]，Walt Whitman (1819—1892)[17]，も Joaquin Miller (1841—1913)[18] も自然や田園を歌った。Janes Fenimore Cooper (1789—1851)[19] の story の中にも自然描写を発見することができる。19世紀をむかえて，自然生活の賛美者は Ralph Waldo Emerson (1803—1882)[29] と Henry David

Thoreau (1817—62)[21] が著名であることは読者の知るところであろう。Emily Dickinson (1830—86) については他の機会に詳しく触れる。Emerson は哲学として自然を説明した。

Emerson の自然観から考察を進める。「精神には物体の形体を取って自己を表現すべき必然性が内在しているように思われる」それだから「神の順序においては，精神が先きで自然が次である。精神の中に純粋の法として存在していたものが，物質に具現して自然となったのである」世界を単一な霊の表現と見るならば，私達はこの世において孤立する物は一つとして無く，一切の分離分割は外見であって，宇宙はその奥所において血縁につながる不可分の渾一体であるとみなければならないという見解を取るのであるが，これはEmersonの「全体」("wholeness") の教へにつながるものである。自然においても人間においても自存力の多いもの程実存の程度が高いのである。これは Emerson の自恃の説につながる。個人は神の具現であり，神の属性であって絶対的価値である真善美の方面において，個人は奇蹟を成しとげるだけの素質を持っている。それだから人は己に信頼をしなければならないというのである。この思考は "The American Scholar" へのアメリカ文化独立の論につながる。神を過去でなく，現在と現実の中に置けと忠告する。自然界及び社会における一切の現象は，神の刻刻の啓示であって，無限者そのもの，及び活動をのぞき込む窓であり又精神的なものの象徴物或はその相対物であるという見解をとる。重要なのは自然の啓示の方面であって，自然による霊の訓練である。自然界の事実はそれ自身のために在るのではなくて，精神的，象徴的になんらかの観念を具現するために存在するのである。自然の法則も人間と関連してはじめて意義があるので，四秀の現象でも人生の四季の象徴となってはじめて愉快に感動するのである。従って，Emerson によれば "symbolism" とは，自然の事実の人間化に外ならないのであって，そこから自然 ("Nature") を研究せよ，「己を知れ」ということが生れるのである。

次に Thoreau の自然観にうつるが，Thoreau の自然観については筆者は既にその自然観に関して見解を詳しく[22] 発表したが，ここではその中心点を簡約して書き留めておくことにしておこう。Th-oreau の自然観は，主に "Walden, or Life in the Wood" (1854) それに "A Week on the Concordand Merrimack River" (1854) "The Main Woods" (1864), "Journal" (14vols. 1906) に読みとることができる。Henry James (1843—1916) が "Hawthorne" 伝の中に述べているように「超絶主義」("Transendentalism") は特有な土壌にのみ輸入した文化によって，静かに掘りおこされ，補給された New England の道徳の土壌にのみ発芽することのできたもので，Thoreau はこの土地の息吹きに触れていたのである。更に James は次のように述べている。"Henry Thoreau, a delightful writer, went to live in the woods; but Henry Thoreau was essentially a sylvan personage, and would not have been, however the fashion of his time might have turned, a man about town" (「魅力ある作家 Henry Thoreau は森の生活に出かけたのであるが，Henry Thoreau は本来森の住人であって，Thoreau の時代の流行がどのように変わろうとも，社交家にはならなかったであろう」)

1938年 Merrimack 川の奥地を旅行した時において接した自然は自己投影の対象であって，現実から離れようとする夢を追うに過ぎなかったものといえるであろう。けれども "Walden" の自然への接し方は，只単なる森の生活でなく，又自然は単なる自己投影の対象でもなく，「自然」と「我一人」と共に生きる実験にふさわしい場としての自然であった。従って，自然と共に生きることとは，それだから実験に直面してみなければ予測を許さぬ意識そのものの実体であったのである。それで Thoreau は観念化された自然像から離脱して，多様な実体群（或は個体群）を細心緻密な観察力によって解体してみようとしたのであり "Walden"はその探究の記録であった。又このような生活が果して生きるに価するものか，その確認のための実験の記録でもあったのである Thoreau の作品にあらわれる自然，或は自然観にはヨーロッパのロマンティシズムの枠内に入る面も多いわけだろう。例えば，Wordsworth のように Thoreau も自然を通じて崇高な vision を把えて

いるし，又，Thoreau のかっての師であったEmerson の"Over-Soul"と合致するところがあったとしても，Thoreau には Thoreau の特徴があった。Concord で生れ Concord で育ち，自分の肉体を Concordにかえしたthoreau は，Concord の自然（アメリカの自然）にアメリカ的態度で，実践的に具体的に自然に密着することによって自然を観察した。それは精緻な博物学者の態度にも等しい。そして，Thoreau の精神は自然に帰ることによって自然を観察した。人間の本源に帰り人生の "reality" を見極めようとする。意識の表層に低迷去来する一切の我執の想念をとり去り，自然に直面する体験を持とうとする。主観が客観と渾然合一するためには，主観は純乎として純なものであらねばならない。心の奥底において客観的なものと融合しなければならない。有限なものと無限なものとの交流が行われ，過去から現在へ未来へと流れる時の流れにおいて永遠なるものに触れるところまで進まねばならない。この域に達し得ないかぎり，死の可能性を担って生きる有限の人間の淋しさは消えることがないであろうと思うのである。Thoreau が，この森の生活において，自然の洞察において感得したことは，自然の実体性であった。自然の個体が実体として息ずいていることであった。そして個体が実体として息ずいているのは生活の単純化の方法とは逆に，いかなる汚濁もいとわず，それを吸収して行く逞しい野性のおかげであると覚った貴重な体験であった。Thoreau が観念と実体との接点に描いた探究の軌跡はアメリカ文学を観念的な幻想から救出し，"realism" の視点を芽生えさせる一つの起点となったと言い得るであろう。

今回は文学と自然の考察をここで止めて置かねばならなかった。英米文学にあらわれた自然観と日本文学にあらわれた自然観或は各作家，詩人の自然観における相似点相違点についての精細な考究は次回にゆずることにしたいと思う。

(1970. 1. 10.)

注1）Walter Savage Landor (1775—1864)，英国詩人。William Wordswoth (1770—1850) 作 "Lyrical Ballads" (1798)と同年 "Gebir"を発表。続いて "Chrysaor" (1802), "Count Julian" (1812), "Imaginary Conversations" (1824—29), "Hellenics" (1847) を発表。

2）Alexandor Pope (1688—1744), 英国詩人。"An Essay on Criticism" (1711), "The Rape of the Lock" (1712), "Windsor Forest" (1713), "The Dunciad" (1728), "An Essay on Man" (1732—34), 最後のものは有名で Lord Bolingbroke (1678—1751)の哲学に影響を受けて heroic couplet で書いた四篇の書簡からなる哲学詩。

3）大西克礼著「自然感情の類型」（昭和23年7月20日要書房発行），西欧および日本の文学に現われた自然感情に対して整理を試み，一種の類型論的考案と比較研究の方法を経緯させた研究書。

4）大西克礼著「万葉集の自然感情」（昭和18年4月15日岩波書店発行），万葉集におらわれる自然感情の諸相を考究しようとして，比較研究の方法を用い，自然感情の本質を闡明しようとしたもの。

5）土居光知著「文学序説」（昭和2年2月1日〔増訂第一〕版岩波書店発行）「自然の愛の発達」(pp.341—393)

6）Henry Thomas Buckle (1821—1861): "History of Civilization in England", 英国文明史家・文明発達の要因を風土的自然環境に求め，歴史研究法に新生面を開いた書。

7）Charles de Secondat (baronde) Motesqnien (1989—1755): "L'Esprit des lois", フランスの啓蒙思想家。この「法の精神」は18世紀を通じて屈指の名著で，法律，制度の歴史的，実証的研究

8）Giordano Bruno (1548—1600). イタリアの詩人・哲学者。主著として "De la causa principio et uno" (1584), "De l'infinito, universo et mondi" (1584).

9）Jean-Jacgnes Rousseau (1712—1778). フランスの思想家・文学者。その最大の文学的著作は "Les Confessions" (1781—1788). その根本思想である自然の説は「自然は人間を善良・自由・幸福に作った。けれども社会は人間を邪悪・奴隷・不幸にした」という命題につきる。

10）William Wordsworth (1770—1850). 英国の詩人。"Lyrical Ballads" (1798), "The Excursion" (1814), "The Prelude (1850執筆は1792—1805), "The Recluse" (1888), その他の詩集がある。

11）George Gordon Byron (1788—1824) 英国の詩人。"Childe Harold's Pilgrimage" (cantos Ⅰ, Ⅱ) (1812) Edmund Spenser 風の詩形を用い孤独詩人の憂愁を歌いあげている。"Childe Harold Pilgrimage" (cantos Ⅲ) (1816) (ca-

ntos Ⅳ) (1818) その他作品がある。

12) Percy Bysshe Shelley (1792—1822). 英国の詩人。"Lyrics - Ode to the West Wind (1819), To a Skylark (1820), The Cloud (1820)" その他作品がある。

13) John Keats(1795—1821) 英国の詩人。"Endymion" (1818) "Lamia" (1819), "Ode to Psyche, Ode on a Grecian Urn, Ode to a Nightingale" "To Antumn" (1819), "Hyperion" (1818—1819) その他の作品がある。

14) David Herbert Lawrence (1885—1930) 英国の小説家・詩人。小説，詩の外に評論 "Studies in Classic American Literature" (New York 1923), (London 1924) がある。

15) William Cullen Bryant (1794—1878). アメリカの詩人。"Thanatopsis" (1817), "Lines to a Waterfowl" (1817), "A Forest Hyme" (1825). その他の作品がある。

16) John Greenleaf Whittier (1807—1892). アメリカの詩人。"Mogg Megone" (1836), "Snow-Bound" (1866) これは田園生活を歌った長詩，The Tent on the Beach" (1867) その他の作品がある。

(17Walt Whitman (1819—1892) アメリカの詩人。"Leaves of Grass" (1855) "November Boughs" (1888) その他の作品がある。

18) Joaqnin Miller (1841—1913). アメリカの詩人・本名 Cincinnatus Heine (or Hiner) Miller. "Pacific Poems" (1870—1871) "Songs of the Sierras" と改題。その他の作品がある。

19) James Fenimore Cooper (1789—1851) アメリカの小説家。"The Pilot" (1823), "Leatherstocking" Tales — The Pioneers, or the Sources of the Susquehanna (1823); "The Last of the Mohicans" (1826); "The Prairie" (1827); "The Pathfinder, or the Inland Sea" (1840); "The Deerslayer, or the First War - Path" (1841)" その他の作品がある。

20) Ralph Waldo Emerson (1803—1882). アメリカの詩人・学者思想家。"Nature" (1836), "The American Scholar" (1837), "Essays" (1841—44), "Poems" (1847), "May Day and Other Pieces" (1867). その他の作品がある。

21) Henry David Thoreau (1817—1862). アメリカの社会批評家・随筆家・詩人。"A Week on the Concord and Merrimack Rivers" (1849), "Walden, or Life in the Woods" (1854), "Excursion" (1863), "The Maine Woods" (1864), "Journals. 14 vols." (1906) その他の作品がある。

22) 日本ソロー協会にて研究発表。拙稿「"Walden" 再読——人生と文学，そして自然」

追記) 日本文学，英米文学にあらわれる自然観，或は各作家，詩人の自然観における相似点と相違点を論述する前に，日本文学と英米文学における自然観の概観を述べておく必要があると考えてこの論稿では，それを主に述べることにした。そして日本文学の自然観に関する歴史的概観とその変遷は，高瀬重雄著「日本人の自然観」の構想と叙述によるところが多い。この著書は戦時中（昭和17年10月出版）のもので，知る読者はいたって少いと思うので，この際明記しておきたい。一般教養の向上に役立つ好著書である。日本文学，英米文学における自然観の相似点と相違点についての筆者の見解は次回に論述することにする。